

## 日独通訳者養成 プログラムについて

2002年度に引き続き、2003年度も、日独通訳者養成プログラムをDESKの活動の一環として継続することができた。本プログラムは、昨年のDESK NEWSLETTER (No.5)における報告でも触れたように、二つの目標を掲げている。一つは、実際に活動できる優秀な日独両言語間の通訳者を養成することであり、今ひとつは、実際の通訳者養成教育を通して、通訳者養成に必要なノウハウを蓄積し、今後の教育コンセプトを作っていくことである。

その実現のために、教える側には2003年度も、国内トップの日独会議通訳者である桑折千恵子氏、四半世紀近く欧州における日英独のトップ通訳者として活躍してこれら国際会議通訳者協会 (AIC) 会員でもある吉村謙輔氏、同じく日独通訳の第一人者である蔵原順子氏という、これ以上望みようのない現役通訳者スタッフの協力を得て活動を行なうことができた。またコース参加者たちに関しては、独検1級レベル以上の語学力を持った、既に時折会議通訳や商談通訳をしている若手通訳者たちやドイツ連邦共和国大使館の日本人スタッフといったハイレベルの参加者たちをコアに、他方で東京大学・東京外国語大学などの学生・卒業生を加えた混成チームとなっている。ちなみに、これら学生たちにとって、本通訳養成コースのレベルは当然ながら高すぎて研修内容によってはときに「見学」せざるを得ないことがあるものの、ハイレベルのドイツ語教育でもある通訳者養成コースから情報や刺激を得られることは多く、また通訳者グループにとっても学生たちの率直な発言から思いがけない視点や認識を得られるという点で、異なる集団の間の生産的な「異文化間交流」にはさまざまなメリットがあったと思われる。むろん、毎日授業を行なう通訳学校のような活動をしているわけではない以上、各参加者にとって本プログラムは、通訳者をめざした研修の一つのきっかけ以上のものではあり得ない。その意味で、本通訳者養成コースは、参加者たちにとっては自ら学ぶ上での学習法や自己研鑽のやり方を身につける場であり、われわれ教育スタッフにとっては何よ

り、通訳者養成教育を通して、通訳者養成に必要なノウハウを蓄積し、通訳者養成教育に必要な教育コンセプトを練り上げ、さらには「よい通訳とは何か」を総合的に検討する貴重な場となっているのである。

さて、2003年度の活動も、大きく2つの柱から成り立っていた。一つは、東京大学駒場キャンパスにおける毎月最終日曜日 (13時～18時) の例会であり、今ひとつは、夏と冬の年2回2泊3日のブロックゼミナールである。合宿参加者は、教員スタッフを加えて総勢約30名程度となっている。毎月の例会では、ときにドイツ大使館からの講演者やドイツ語発音に関する専門家を招いてレクチャーをお願いしたりすることもあったが、基本的には日→独・独→日の逐次通訳訓練を中心とする個別訓練メニューを行なうことが多かったため、ここではブロックゼミナールについて報告しておきたい。なお、このブロックゼミナールは、産業総合研究所テクノ・グロースハウスのご厚意により同研究所で定期的に開催させていただいているが、最先端技術の研究開発で知られる産業総合研究所には、単にすばらしいブースの備わった理想的な研修会場をご提供いただいているのみならず、毎回必ず講演者を手配してご講演もいただいております。テクノ・グロースハウスおよびその職員の方々に

は、この場をお借りして心からの感謝を申し述べさせていただきたい。内容的に高度な専門的内容のある程度素人向きにパラフレーズしてお話しいただく形のこれら講演は、自分が知らないいかなる専門的内容をも通訳していかなければならない通訳者をめざす訓練生にとって、毎回、事前にいただく資料や原稿の準備段階から、きわめてハードではあるが絶好の訓練教材となっているのである。

さて、2003年度最初、通算第3回のブロックゼミナールは2003年8月29日から31日の2泊3日で行なった。29日には、産業総合技術研究所の山本晋氏による「地球温暖化のメカニズムと防止技術の動向について」と題する正味1時間ほどの講演を、まず参加者二人一組で順番に逐次通訳し、講演後、長時間かけてビデオによる訳出パフォーマンスを逐一検討していった。翌30日午前中には筑波大学教授でDESKの客員教授でもあるHarald Kleinschmidt氏よりKolonialismus und Europa (植民地主義とヨーロッパ) と題する講演を頂いた。これも二人一組で参加者が独日の逐次通訳をしていったが、Kleinschmidt氏には内々に、事前に頂いていた原稿の読み方にさまざまなヴァリエーションを加えるようお願いしておいたため、「忠実に原稿を読み下すタイプ」から「原稿そっちのけで



日独通訳者養成プログラム：ブロックゼミナールの講師と参加者

自由に講演するタイプ」に至るさまざまな講演者に対する対応をも訓練することができた。午後の通訳パフォーマンス検討に際しては、同じく筑波大学のHerrad Heselhaus氏による講演原稿の詳細なテキスト分析をお願いし、テキストへの注意深い観察と洞察が通訳する上でいかに必要かを身を以て体験することができた。さらに夜のプログラムとしては、桑折千恵子氏より、通訳準備に際して必要な情報収集・整理のノウハウをレクチャー頂いた。

第4回ブロックセミナーは2004年1月10日（土）～12日（祝）の2泊3日で開かれた。産総研からは産総研国際部門のシニア・リサーチャー橋本佳三氏より「産業総合研究所（AIST）日本最大の公的研究機関の紹介 - 若干の日独交流エピソードをまじえて -」のご講演をいただき、いつものように深夜までビデオをもとに通訳パフォーマンスの検討を行なった。その他にも、シュレーダー首相のイラク戦争に関連した施政方針演説を題材にした「テキストの表層的意味と意図との乖離」に対する対処法の練習、また社会的市場経済に関する講演を教材とした少人数グループ毎での逐次通訳訓練を行い、吉村謙輔氏からは「生き生きとした訳の実現について」と題して、実際の逐次通訳での訳出に関する実践的なレクチャーをいただいた。

このように盛りだくさんのブロックセミナーを中心とする日独通訳者養成プログラムは、個々の参加者にとって得難い研修機会となっている以上に、通訳者養成に関する制度化が遅れている日本のドイツ語教育にあって、通訳教育に携わるわれわれ教員たちにとって貴重な情報源となっている。通訳者養成教育のプログラムを考え、高度な実践的視点からドイツ語教育を考え、また理想的な通訳・翻訳のあり方を考えてゆく上で、得難い機会となっているDESK日独通訳者養成コースについては、今後もさらに継続・発展し、そこで得られる知見を蓄積していずれ何らかの形で少しずつ公開していけるよう、努力を続けてゆきたいと考えている。

相澤啓一  
(筑波大学助教授・東京大学非常勤講師)

## チュートリアル 活動について

### 2003年度夏学期

新入生を対象とする夏学期のチュートリアルでは、欧州各国の外交政策をテーマに取り上げた。これまで扱ってきたEU東方拡大や欧州安全保障との関連も考慮しつつ、EU内で中心的役割を担っているドイツ・フランス・イギリスを事例にあげ、さらに旧ユーゴスラヴィア地域の問題についても取り組んだ。また、各国外交については、より実践的な視点から議論を行なうために、ドイツ、フランス、イギリスの駐日外交官をゲストに招いて講演会を開催した。以下、夏学期のチュートリアルについてそれぞれのテーマごとに簡単に内容を紹介する。

旧ユーゴスラヴィア地域に関しては、まず5月13日に、ボスニア紛争を題材とした映画『ノー・マンズ・ランド』を鑑賞し、紛争の背景や国連の役割に関して考察した。そして6月17日には、総合文化研究科国際社会学専攻博士課程の河村弘祐氏が「旧ユーゴスラヴィア紛争とヨーロッパ安全保障秩序」というタイトルで発表を行なった。河村氏は、映画『ノー・マンズ・ランド』の解説のほか、パワーポイントを用いてユーゴスラヴィア連邦の歴史と、西から東へ展開された旧ユーゴスラヴィア紛争の経緯を紹介した。そして、内政不干渉の原則と人道的介入の論理という問題に焦点を当てながら、国際的関与の問題について説明し、紛争がヨーロッパ安全保障秩序に与えた影響を分析した。発表後は参加者との間で、旧ユーゴスラヴィア諸国の独立の背景や、EU東方拡大の展望などについて議論が重ねられた。

欧州各国の外交政策については、まずフランスを取り上げた。5月20日、駐日フランス大使館からF. フィエスキ書記官を迎えて、フランス外交政策に関する講演会を開催した。フィエスキ氏はフランス外交史を概観するとともに、「独立した外交」と「国際協力」という外交原則の特徴を、EU・NATO・国連内でのフランスの役割を事例にあげて解説した。また、国際社会の一員として、国際舞台上で軍縮・人権問題などについて積極的提案を行なうフランスの基本姿勢について紹介

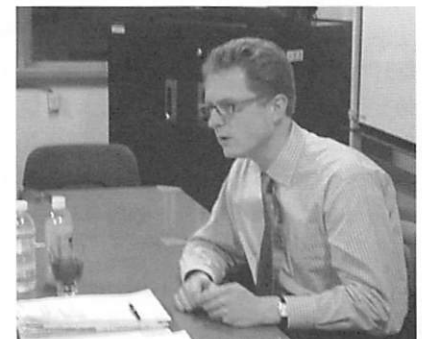
した。続いてイラク戦争前後における対米関係や、今後、国連の果たす役割について語った。学生との議論では、欧州各国の外務省レベルでの連携や、「EUの将来に関するコンベンション」（欧州協議会）での構造改革議論と欧州憲法論議、「ヨーロッパはどこまでか」という問題、NATOとフランスの関係などがテーマに上がった。

フランス外交官講演を受けて、翌週の5月27日、総合文化研究科国際社会学専攻博士課程の吉田徹氏が「フランス外交の現状と過去 - 『大西洋関係』を中心として」をテーマに発表を行なった。吉田氏はフランスの内政と外交との相互関係を考慮しつつ、イラク戦争反対の背景を分析し、さらに、冷戦史における米欧関係とポスト冷戦期のフランス基本外交方針について解説した。また、フランスにおける反米感情の系譜について触れ、イラク戦争後の米仏関係を、ドイツ、イギリスとの関係も視野に入れながら展望した。発表後はフランスの労働運動や、中間団体、日仏関係などについて、参加者との間で議論が展開された。

イギリスについては、まず6月3日に総合文化研究科国際社会学専攻博士課程の芝崎祐典氏が、イギリス外交史に関する発表を行なった。芝崎氏は最初に第2次世界大戦までのイギリス外交



講演会「EUの現在」(C.ケイザー氏)



ドイツ外交官講演(F.ハルトマン氏)